BLOOD
RED
SUNSET

マアポー
馬波
訳
和田武司
多田佳子

老鬼（ラオクイ）

わが青春の文化大革命

上

BLOOD
RED
SUNSET

マアボー
馬波
訳
和田武司
多田佳子

老鬼（ラオクイ）

わが青春の文化大革命

上

集英社

■翻訳者略歴

和田武司（わだ たけし）

1933年東京都生まれ。1957年東京都立大学人文学部中国文学科卒。1988年拓殖大学外国語学部教授。主著に『陶淵明全集』（岩波文庫、共訳）、『正史三国志』（徳間書店、共訳）、『小説「芙蓉鎮」』（徳間書店、共訳）、『マンガ老荘の思想』（講談社）、『楽しむ四字熟語』（岩波書店、共著）、『三国志考証学』（講談社）ほか。

多田佳子（ただ よしこ）

1956年東京都生まれ。1978年桜美林大学文学部中国語中国文学科卒。月刊「ほおゆう」編集部、中華人民共和国文化部外文出版社勤務を経て、現在千葉工業大学工学部講師。著書に『中国』（ビジネスインデックス社、共著）、『本屋の誘惑』（洋泉社、共著）、『愛人・あいれん〔中国的離婚事情〕』（五月書房）ほか。

老鬼・上
——わが青春の文化大革命
一九九六年一二月一八日　第一刷発行
著　者　馬波
翻訳者　和田武司・多田佳子
発行者　小島民雄
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二—五—一〇
郵便番号　一〇一—五〇
電話　編集部（〇三）三二三〇—六一四一
販売部（〇三）三二三〇—六三九三
制作部（〇三）三二三〇—六〇八〇
印刷所　廣済堂印刷株式会社
製本所　株式会社石毛製本所
乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1996 MA BO／TAKESHI WADA, YOSHIKO TADA, Printed in Japan
ISBN4-08-781133-6 C0022

老鬼・上——わが青春の文化大革命

目　次

はじめに――『老鬼』日本語版出版まで 5
1 内モンゴルへ 10
2 氷の草原 23
3 イングスのことで徐佐と絶交する 41
4 兵団の接収管理 56
5 八 対 〇 63
6 悍馬を馴らす 72
7 血みどろの対決 88
8 防衛強化 102
9 同 情 116
10 大衆参加の整党 122
11 頭を冷やせ、と雷夏は言った 133
12 でぶ指導員 139
13 不意打ち 144

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

14 沈指導員のねらいはあたった 156
15 血書 165
16 重い圧力 170
17 僕はあわてなかった 174
18 やられた！ 181
19 気勢をそがれる 191
20 六大罪状 207
21 裏切り 219
22 連日の取り調べ 228
23 分裂瓦解 235
24 処分待ち 242
25 結末 248
26 労働改造 264
27 石切り山 289

28 母は関係を断ち切った 305
29 伐　採 319
30 血と汗の報い 333
31 凍土のなかで 349

装丁——岡　邦彦

はじめに——『老鬼』日本語版出版まで

あの、世界じゅうの注目を集めた天安門事件の最中、広場を埋めつくした多くの青年たちの輪のなかで「民主大学」が発足したことを、ご存知の方は少ないかもしれない。もちろん正式の大学ではなく、臨時に作られた壇上で、さまざまな講義や演説をする「青空大学」であった。そのときリーダーになったのが趙紫陽のブレーンで社会科学院政治学研究所所長の厳家其と、この本『老鬼』の著者馬波である。厳家其は年の功もあって演説もうまく、まさに広場のリーダーとして学生や青年たちをアジった。壇上で、理路整然と、しかも印象的に話をする厳家棋に対して、若くてしかも口下手な馬波は、ただ手を振って聴衆の歓呼にこたえただけのことも多かったという。

馬波が天安門の学生たちの兄貴分として、シンボリックに民主大学の壇上に立たされたのは、理由があった。それは、彼の母親楊沫が（日本でも多くのファンがいた）、名著『青春の歌』の著者として有名であったからではなく、少し前に、彼自身が書いたこの本『老鬼』が、多くの若者たちの心をとらえていたからであった。

『老鬼』は、発売と同時に本屋の前に長い行列ができ、著者馬波はサイン攻めに合うほどの人気だった。これまでの中国の出版界では前例がないほどで、それはさらに口こみで広まり、そのときすでに四〇万部以上発行されていた。

『老鬼』が評判になったのは、元紅衛兵や文革世代を中心として、非常に多くの中国の人々の共

感を呼び、かつて文革中、中国のどこでも行われた「事件」や身近な出来事が、生々しく正直に書かれているためである。「まるで自分の恋人が、今まで誰にも見せなかった日記を初めて見せてくれたような」衝撃。小説という形で書かれてはいるものの、プロでない作家のノンフィクションとしての力強さ。そして、なによりも、多くの人々のひしめく生存競争の激しい社会で、人間の限界に挑戦した力強い記録に、多数の若者たちが賛同し、喝采を贈ったためである。

この物語は、主人公、林鵠と北京の高級中学の仲間だった雷夏、徐佐、金剛の四人の青年たちが、血書まで提出して内モンゴル自治区の北、西ウジムチン旗、バエンモホ牧場に下放するところから始まる。

四人の青年たちは、それぞれの個性と信条にのっとって草原で助けあい、裏切り、そして激しい政治闘争に巻きこまれていく。彼らのまわりを取り巻く、同じように都会から来た女子学生のリーダー劉英紅、李暁華、それに恋人の韋小立。彼らを「監督」する党や軍の「指導員」や「調査官」。さらに、もとからこの草原にいたモンゴル族の牧畜民たち――そういった人々が、研ぎ澄まされた観察眼で生き生きと描かれ、この物語を迫力あるものにしている。それはまるで、他国のものとは思わせないほどの親近感を我々読者に与え、登場する青年たちは、見渡せば、自分のまわりにも彼らによく似た分身がいるだろうと思わせる。青年たちの若いがゆえの純真さ、ひたむきな情熱、そして強さと弱さが、てらうことなく素直に書かれているところが、世界じゅうの読者の共感を呼んだのであろう。そしてなによりも、これが中国国内で書かれたものであることも特筆に値する。と同時に、文革は風化せず、そしてこれからも、永遠の文学のテーマとして生きつづけるだろうと改めて認識させられる一編でもある。

天安門事件の「終結」の直後、馬波は行方不明となり、その生死さえ確認できない状態だった。そのとき我々が家族と接触をもってから七年の歳月が流れた。途中さまざまな障害があったが、翻訳、出版をするまでにそのような時間が必要だったとも言える。馬波は、その後、香港からヨーロッパ経由でアメリカに渡り、アメリカ政府の庇護（ひご）のもとブラウン大学に通った。のちにアメリカ政府は、中国に民主化の要求を再三行い、あるとき、貿易の特恵国待遇の延長を切り札に、方励之（ファンリーチ）や馬波の家族を出国させることに成功した。出国を前に、国と国との秘密裏の大きな交渉ごとのはざまで揺れ動く家族の不安を我々は再び目撃し、かつ信念をもってそれらを実行するアメリカ政府にも感心した。

我々は、プロレタリア文化大革命の実態を、その終結の前から、多くの日本人に知らしめたいという思いでいっぱいだった。そのころの日本の新聞やマスコミが、どのような書き方をしていたか覚えておいでであろうか。文革やその推進者であった四人組の賛美で、紙面は満ちあふれていた。しかし、実態はまったくその逆であった。本当に中国の人民の幸せを考えたなら、政府発表のお先棒ばかりを担いだ記事は、人民にさらに苦しみを与えることになる。戦前の日本軍の中国での蛮行を告発するのも結構であろう。前政権の悪口を言うのはじつに簡単である。しかし、現政権の矛盾も勇気をもって報道すべきであろう。

だが、文革当時、そういった記事やニュースを流した人たちは、今もってその罪の意識も責任感ももっていない。日本の新聞が『人民日報』の記事をそのまま日本に送ることをもって「事実の報道」とするのなら、単にメッセンジャーボーイであり、戦前の「大本営発表」と変わらない。大本営が「米軍機何機撃墜、敵艦何隻轟沈、大破」と〝発表した〟のは、〝事実〟だといってい

るのと同じだからである。本当は事実の裏に隠されている「真実」をどう発見するかがジャーナリズムの役目であろう。残念なことに、今現在も、日本にはジャーナリストはいない。ニュースを製造する流れ作業のなかの雇われサラリーマンだけである。

文革は単に中国で起こった巨大な悲劇ではない。大きなイデオロギーにとらわれた「無知なる大衆や羊の群れ」が、さまざまな事件のたびに、どのような行動様式をとり、どういった運動のモーメントとなって動きだすか、「人間そのもの」の一大実験場であった。それは共産主義に限らず、宗教や、我々が意識しないうちにとらわれている思想をも含めて、人間社会のためされている試練でもある。テーマは「大衆とはなにか」「人間とはなにか」である。そしてそれは、激しさの差はあれ、今も世界じゅうで実験されている。日本においても、決してよそ事ではない。

編集子

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

老鬼・上

——わが青春の文化大革命

1　内モンゴルへ

僕の親友の雷夏（レイシア）ときたら、「紅紅紅（ホンホンホン）」〔北京四七中学・高校の学生組織。父、祖父、曾祖父（ぞうそふ）の三代続いて革命に従事したという意味をこめた名称〕の連中から、ずっとつけねらわれているというのに、仲間を送りに駅へ行くと言ってきかない。

「覚悟はできてる。とにかく仲間を送らなくちゃ。顔をめちゃくちゃにされたって、肋骨（ろっこつ）が二、三本折れたって、かまうもんか」と雷夏は言う。

僕と雷夏はナイフを腰に差し、手には鉄のリングをはめて、北京駅にやってきた。

今日は、黒竜江省へ行くグループの見送りだ。

ホームは黒山の人だかりだった。出発する仲間が、友人に取り囲まれている。みんな興奮した面持ちで、笑顔を浮かべている。沈んでいる者など一人もいない。少しばかり悲しくたって、こんなに盛大に見送られたら、誰だって崇高な気分にならずにはいられない。

一九六八年、幼くも熱い「青春の奔流」が、農村へ、山地へ、茫々（ぼうぼう）たる荒野へと流れこんだ。十字軍の東征ではないが、歴史に残る大きな出来事だった。また、民族大移動でもないのだが、数千数万の家庭を離散の苦しみへと追いやるはずだった。さらに、連日、砲火の飛び交う戦場へ赴くのでもなかったが、みんなはまるで出征兵士のように意気ごみ、あたりは義勇心と悲壮感とに満ちあふれていた。

「文化大革命」〔一九六六年五月から一九七六年一〇月にかけて行われた政治運動。結果的には内乱状態と

なり、全国に重大な災難をもたらした〕が始まってからというもの、ずっと学校へ顔を出さなくなっていた学生の姿もあった。「紅紅紅」につけねらわれ、見つかったら頭を割られそうな連中も、危険を冒して送りに来ていた。絶えずあたりに警戒の目をやりながら。

僕のまわりは「文化大革命」に鍛えられた、あの暴力的な紅衛兵たちだ。彼らは、どうしてこんなにやさしいんだろう。みんなノートやアルバム、飴の包みや果物を、旅立つ仲間のポケットやかばんに詰めこんでいる。赤く泣き腫らした目、友情あふれる会話……。ふだんは仲が悪く、口さえ利かない間柄でも、今は名残惜しげなまなざしを交わしている。

あの波乱に満ちた三年間の「文化大革命」を、誰が忘れられよう。燃え盛る緊張の日々のなかで生死を共にした同志が、今こうして離れ離れになるのだ。つらくないわけがない。

「向こうに着いたら手紙をくれよ」

「ああ、君のこと、忘れるもんか」

「軽々しく人を信じるなよ。社会は複雑なんだから」

「僕は、それほどばかじゃない。安心しな」

「戦おうぜ。反修〔反修正主義。マルクス主義を修正して解釈するという形をとった、マルクス主義に敵対する理論と運動。ここでは当時、対立していたソ連を指す〕の戦場で会おう」

「僕たちの世代で実現するだろうか」

「社会に出たら、言葉に気をつけろよ。大きなことは言うなよ」

「わかってるって」

大勢のささやき声がざわめきとなって、プラットホームを包みこんでいた。恋人たちは周囲をはばかって、手を握り合うことすらできず、懸命に平静さを装い、小さな声で別れを惜しんでい

る。母親がぼろぼろと涙をこぼしながら、娘の腕を引き寄せては、何遍言ったか知れない話を、またくり返している。いつもかばんにナイフをひそませている血の気の多い「紅紅紅」の奴らでさえ、今日は打って変わって親切になり、汗をたらして荷運びを手伝っている。

突然、ベルが鳴り響いた。ホームの拡声器から毛主席の語録歌〔当時、国防部長で、文革の有力な指導者であった林彪（りんぴょう）が編集した毛沢東の語録集〕が高らかに響いてきた。

「世界は諸君と我々のもの……」

意気軒高たる歌声、崇高な音の響きが若者の血をたぎらせた。

ディーゼル機関車がうなるような汽笛をあげ、動きはじめた。見送りの人々が先を争うように車窓へ駆け寄る。列車がスピードをあげるにつれ、女子学生の一群のなかから嗚咽（おえつ）が漏れてきた。涙を見せるのは恥だ。ホームに残る僕は、なんでもないように手を振った。鼻のあたりがツーンとなった。

動く車窓を追って、たくさんの若者が走りだす。雷夏もその一人だった。顔をくしゃくしゃにし、懸命に手を振って、「おーい！　おーい！」と叫んでいる。一人の母親が突き飛ばされた。ミカンがあたり一面に転がったが、拾おうともせずにあわてて起きあがり、アヒルのような格好でよちよちと列車を追った。

ああ、労働者や農民と連帯する感激も、北京を離れる学生たちの悲しみを消し去ることはできなかった。革命歌の鼓舞も、流れ落ちる涙を止められなかった。北京駅のホームは、すすり泣く声でいっぱいになった。

別れを告げあう声のなかを、列車は進んだ。レールの音も、生身の叫び声に圧倒されていた。数十秒後、列車は東へと延びる線路のかなたに消え去った。ついさっきまでホームをいっぱいに

していたすすり泣きや叫び声は今はない。静まり返ったホームをあとに、人々は次々に改札口を出ていった。

「紅紅紅」の連中が、いちゃもんをつける相手を物色するように、周囲をきょろきょろしはじめている。

僕は、列車が消えた方向に親指を立てた〔「すばらしい」という意思表示〕。

「君たちは、英雄だ」

僕と雷夏は、黙ったまま歩いていた。いろいろな思いが心をよぎる。高二のあるグループは、歩いてチベットまで行こうとした。山西省のある村で民兵に捕まり、身ぐるみはがされ、二人は北京に逃げ帰ったが、多くの者はなおもチベットめざして進んでいったという。中一のある少女は一三歳になるや、坊主頭になり男装をして、たった一人で、あの果てしない内モンゴルの辺境へ向かって行った。高一のある反革命分子〔革命に反対する者として社会的制裁を受けた人々〕の息子は、何度も共産党中央執行委員会と毛主席に手紙を書き、「もっとも苦しく、もっとも遠い地で、自分を思想改造したい」と許可を求めた。彼は何度も市革命委〔文化大革命のときに成立した行政機構に代わる権力機構〕の指導者のところを訪ねて、涙ながらに哀願しつづけたという。自分の母親が死んだときには、涙ひとつ漏らさなかったというのに……。

この時代、周囲はそんな雰囲気だった。誰もが先を争って辺境へ出かけた。その動機は本当に純粋なものだった。革命に命をささげようと、みずから望んで旅立ったのである。

学校に戻るなり、僕らは上着を脱ぎ捨て、すごい形相で拳のトレーニングを始めた。雷夏はまるで生きたサンドバッグだ。僕がどんなに殴っても、声ひとつあげない。僕はなにも考えたくなかった。

準備だ。早く。北京を離れる日まで、命がけで拳を習うんだ。武松〔『水滸伝』の一主人公。素手で虎を殴り殺した豪傑〕のような腕の持ち主になるんだ。そうすれば、たとえ地の果てだって怖くない。正義のために悪をくじくんだ！

雷夏はすらりと背が高く、いわゆるハンサムってやつだ。つやつやの黒髪と蘭の花のような白い顔に、いつもうっすらと赤みがさしている。ニキビなんてひとつもない。涼しげな目は子供のように澄んでいるし、鼻筋も通っている。

彼のいいところは二つある。一つめは女嫌いなこと。小学生のころから始まって「文化大革命」まで、女子学生からのラブレターは絶えなかった。でも雷夏は、返事を出したためしがない。二つめはその骨っぽさだ。「出身」〔出身階級。労働者、貧農の出身がよいとされた〕がよくない〔親が金持ちだったり、元地主など〕ので、学校では何度も殴られたが、どんなに殴られても弱音を吐かず、プライドを失わなかった。「紅紅紅」は彼を目の仇にし、ひどい目にあわせてやると公言していた。彼は自衛と報復のために、いつも僕を相手に拳の練習を欠かさなかったし、僕のために平気でサンドバッグがわりになってくれる。

一方、徐佐はやせっぽちである。細い眉毛、薄い唇、髪は猫っ毛で、顔も鼻もちんまりとして女の子のようだが、しかし負けん気だけは強い。徐佐の父親は「老紅軍」〔革命当初から紅軍に参加した者〕で、衛生省の次官をつとめていたが、五九年に労働改造所〔労働による再教育を施す所。文革中、批判された人たちが送りこまれた〕に送られ、失意のうちに死んだ。六七年四月のことだ。

僕たち三人は「毛沢東抗米鉄血団」を結成してベトナムをめざした。ところが、密林で国境警備の民兵に発見され、とっ捕まった。あのとき、徐佐ときたら豹のように暴れまくって、民兵の金玉を蹴りあげたっけ。「串連」〔文革初期に行われた大・高・中学生および一部の教師による交流運

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com